

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる
 ～ 言葉と言葉・文と文のつながりを意識した自己内対話によって ～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

学校提案を受けて国語科部では、本年度の研究テーマを「『発想力』『論理力』『表現力』を育てる～言葉と言葉・文と文のつながりを意識した自己内対話によって～」として、子どもたち自身が、自分の言葉で対象・他者、そして自己に語りかけながら、自身の変容を実感できるような国語科学習のあり方を中心に研究したいと考える。

①国語科における協同的な学び

子どもたちが、国語科の学習を通して「友だちと一緒に学ぶと、ひとりで気付かなかったことに気付けるな。」「学んで楽しいな。」と実感できるようにしていく。そのために、学習内容や子どもの実態に応じ、ペア学習・小グループ学習・全体学習といった学びの形態を取り入れていく。

国語科では、協同的な学びを以下のような場面で積極的に取り入れていく。

- | | |
|-----|-----------------------|
| i | 一人ひとりの読みや気付きを交流する |
| ii | ひとりでは気付かなかったことに気づく |
| iii | 課題を発見する |
| iv | 課題を解決する |
| v | ペア学習・小グループでの学びを共有していく |

表1 協同的な学びの場面

②国語科における2つの焦点化

I 課題意識をもって単元学習に臨む焦点化

国語科では、1つ目の焦点化を次の2つの段階に分けて考えている。

・教材との出会いの工夫

子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的な学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫していく。

例えば、1年生の教材「くじらぐも」であれば、4月の「はる」という中川李枝子さんの詩との出会いから、「中川李枝子さんは他にもいろいろなお話を書いています。見つけられるかな。」と、子どもたちに声をかけておく。そうすると、「先生！『ぐりとぐら』は『なかがわ りえこ』さんのお話だよ！」「おんがくのほんにも、中川李枝子ってあったよ。」と、子どもたちは、目をきらきらさせながら、その作品を見つめるようになる。教師は、「よく見つけたね。どんなお話が書いてあるんだろう。読んでみようか。」と、子どもと作品、そして、作者との距離が近くなるように、読み聞かせをしたり、教室の図書コーナーに中川李枝子さんの絵本を置いたりしておく。そうして、いよいよ、「くじらぐも」の単元に入る時には、「中川李枝子さんが、書いたお話ですね。どんなお話でしょうね。」と、子どもたちが、想像を膨らませながら読んでいけるようにする。

・具体的な学習内容に対する学習意欲を喚起する焦点化

例えば、2年生の教材「お手紙」であれば、ただ「音読劇をしよう」というのでは、子どもたちの学習意欲は高まりにくい。子どもたちが、今からする学習に対して「おもしろそう。」「やってみたい。」「よし、やるぞ。」という思いをもって臨めるようにしていく必要がある。

そこで、「普通の本読みと違って、音読劇となると、台詞を読むときに、がまくんやかえるくんが、どう思っているのかが分からないと読めないよ。難しそうだけど、そんなことできるかな。」「できる！」「本当？！じゃあ、一度1の場面を先生が読むか

ら、その後、だれかに役割音読してもらおうよ。」と言って、子どもたちのやる気を喚起させて、学習活動に入る。

Ⅱ 一人ひとりの気づきを生かす焦点化

例えば、4年生の教材「ごんぎつね」の最後の場面で、「ごんは、兵十に気付いてもらえて、うれしかったと思う。」という健太の感想から授業に入る。明美は、同じところで、「気づいてもらえたけれど、死んでしまったので、かわいそう。」と発表する。この2人の感想には、視点の違いがあるが、それに気づいていない子も多い。ここで、教師が、「明美さんは、だれの立場で考えているのかな。」と学級全体に問うことで、子どもたちは、これまで気づけなかった他者の思いにふれ、新たな考えをもてるようになる。

(2) 国語科でめざす子ども像

対象を多角的に捉え、自己と他者の思いや考えを比較検討しながら、吟味できる子どもを国語科では育てたい。なぜなら、よりよい社会をつくる担い手である子どもたちは、過多の情報を吟味し、批判し、正していこうとする力が必要であるからだ。また主体的な判断能力と、他者と協力して問題解決を図っていくための論理的な思考力や表現力を子どもたちに培える国語科教育を目指していきたい。

そのために、話す・聞く、読む、書くの各分野の学習を通してつきたい力を明確にしていく。本校国語科部では、その力を「発想力」「論理力」「表現力」の3つとしている。以下に、それぞれの力について詳しく述べておく。

「発想力」については、初めて出会う文章に対して考えをもてる力と考える。また、友だちとの話し合いにおいて、他者の考えに触れることにより、今まで考えつかなかった新しい考えを持てるようになること。また、文章を書く場合に他の文章や友だちの作品からヒントを得て、自分の文章を違った視点から作り上げる力だと考える。

「論理力」については、教材を読んでいく際に、教材文の叙述を根拠として論理的に自分の解釈を作れたり、文章を書く際に、より伝わりやすい構成を考えたりすることができる力と考える。

「表現力」については、豊かな語彙を持ち、適切な表現を考えながら話したり、場面にあった適切な言葉を使いながら書いたりすることができる力と考える。

これらの力は、授業で取り上げる教材文だけではなく、読書指導を通して、豊かな読書経験を積むことによってもつけていきたいと考えている。

2. 国語科学習における「学びの質の高まり」

上記のような子どもを育てるために、「～言葉と言葉・文と文のつながりを意識した自己内対話によって～」をサブテーマにして、国語科学習をすすめていく。

そのために、自己内対話を促すと同時に、自己の変容を確かめるために次のような手立てをとっていく。

① 振り返りシートの活用

子どもたちが、協同的な学びを通して、自分の思いをもう一度見つめ直したり、自分の考えを強めたりする。

② 変容を学習の前後で確かめる

多様な手立てがあるが、以下に視覚的な例と聴覚的な例を挙げる。

視覚的な例…子どもたちが、感じたことを色や絵で表したり、シールで自分の意思を表現したり、感情を円の大きさや数値で表したりする。

聴覚的な例…子どもたちが、録音した自分の声を聞いて自己の変容を確かめる。

③ 子どもの発達に応じて、交流した他者から評価をもらう

次項に示す表2の「友だちに添削を受ける」は、高学年での「新聞をつくろう」という学習活動などでいかされる評価方法である。小グループで、子どもたちが互いに、よい書き方を見つけて評価したり、よりよい書き方を示したりする。

また、「保護者から学習を通じた変容を伝えてもらう」は、音読カードに学習の前後で、我が子の音読はどのように変化したかを保護者に書いてもらうことで、低学

年の子どもたちも、自己の変容を感じることができる。

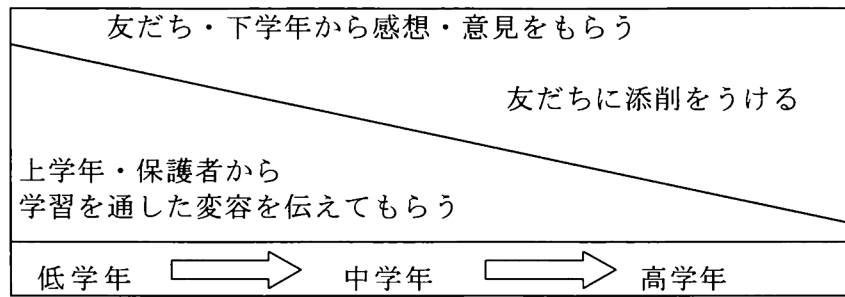


表2 他者から受ける評価

表2の「下学年から感想・意見をもらう」を、5年生の実践を例にして説明する。
例) 5年生「百年後のふるさとを守る」の学習より

教材文を読んだ後、それぞれが選んだ伝記について3年生にブックトークをした。3年生には、それぞれのブックトークを聞いて、読んでみたいと思ったか3段階で評価してもらい、最後に感想を書いてもらった。ブックトークを終えて図書室に行くと、3年生も図書室へ来ていた。伝記のコーナーに3年生が集まっていた。また、「坂本竜馬の本って、どこにあるの。」とたずねられたり、「楠本イネの本、借りたよ。」と報告されたり、3年生からの感想を読み合ったりすることで、自分たちの活動が3年生の読書意欲を動かしたのだと実感することができた。

(下は3年生の児童の感想、右は5年生。)

伝記のしょうかいを聞いて 思ったことを書いてください。

名前()

ふとい本をあきらめたことがなけりれどこのように話をさくはめた"んと思いました。
クオパトラをよみたいなと思いました。
ぜんぶおもしろそうなのでよめた。

3年生の感想



5年生学習の様子

伝記の学習もふりがえて
ふりがえり。
ぎへいの伝記を読んだ時は、さすがに面白かったと思っただけで、
ペーシをめぐるとこの人はこんな事をしたんだと、こ
うのがよくわかりました。
そしてクオパトラを三年組に語りました。
三年組の子たちも少しだけですがクオパトラの事をわ
かってくれたと思います。
これからも伝記をよんでも、昔の偉人の事もしりたいです。

5年生の感想

3. 研究の展望

研究に対する取り組みを「対象」「他者」「自己」の3つの対話ごとに述べていく。

①対象との対話

国語科の学習では、教材文の叙述を手がかりにして、自分なりの解釈や考えを作っていく。その際には、言葉と別の言葉に関連づけたり、文と別の文に関連づけたりしながら対象との対話を行っていくことになる。そこで、(i) どの言葉や描写に着目するか。(ii) 別のどの言葉や描写とつながっているかを考える。(iii) どのような解釈ができるのか。これらを子どもたちが意識できるようにしていく。そのために、学年に応じた単元構成や授業展開がを研究の対象としていく。

「教材作品のどの部分に着目し、他の作品と比べたり、読み広げたりすることによって、教材作品やテーマをより深く理解できるのか」ということも読書指導の観点から研究の対象としていく。

②他者との対話

「文章と友だちの意見とをつなげて自分の意見を更新する」「友だちと別の友だちの意見を聞き比べることにより自分の意見を更新する」といったことができるようにするために、どのような授業展開が有効であるかを研究対象としていく。よって、他者との対話を成り立たせるために、聞き手と話し手の間に情報をやりとりする必然性や目的が必要となる。それらが生み出される課題設定の仕方についても研究の対象としていく。

③自己との対話

自己との対話は、自己の世界と対象・他者との世界を繋げる活動である。この活動をヴィゴツキーは、内言という言葉で説明している。内言とは、言葉の辞書的な語義ではなく、一人ひとりの生活と結びついた言葉の意味をつかさどるものであり、自分に語りかける言葉である。

よって、言葉や文を吟味することを通して、自己内対話がうまれる授業展開と自己の変容を確かめる手立てを研究していく。

4. 研究の評価

学校提案の「学びの質の高まり」がどの程度達成できたかは、質を問題とするために、授業記録をとり、子どもたちの学びの実際をできる限りくわしく記述することにより評価したいと考える。そこで、評価と支援が一体となるように、単元目標に「発想力」「論理力」「表現力」を記していく。

また、「発想力」「論理力」「表現力」の高まりについては、子どもの発達や対象の持つ意味をふまえつつ以下の観点を中心に評価していく。

- ・「発想力」…他者との対話での双方向のやりとりの中で、新たな考えがどれだけ引き出せたか。対象との対話において課題に対して理由や根拠を明確にして、にどれだけ新たな視点を加えられたかなど。
- ・「論理力」…対象との対話において、理由や根拠を明確にして論を展開できているか。他者との対話において、教材と友だちの発言をつなげたり、友だちと友だちの発言をつなげて論を展開できているかなど。
- ・「表現力」…他者との対話において、友だちの発言に沿いつつ自分の考えを加えてどのように表現できているか。また、音読など表現活動の実際、書かれた文章における言葉の使い回し、語彙の豊かさなど。

さらに、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて長期的な研究の成果と課題についても把握を行う。方法としては、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士の比較によって行うこととする。

- 参考文献 「豊かな言語活動が拓く 国語単元学習の創造 Ⅲ小学校低学年編」
日本国語教育学会 東洋館出版社
「小学校国語科学習指導の研究 26 話し合い・聞き合い・学び合い」
石田佐久馬 編 東洋館出版社
「豊かなことば育ちが心と学力の基礎」 村山 士郎 著 本の泉社